「恐竜の骨って美しい」

オタクの情熱に学ぶ

好きだからこそ突き詰められることがある。オタクの情熱が仕事や人生のやる気を増大化させている。

「彼」との出会いは3年ほど前。国立科学博物館（東京・上野）の展示室だった。

息をのむほどの圧倒的存在感。「かっこいい」

彼の名はトリケラトプス。約7千万年前の白亜紀後期に生息した3本角の恐竜だ。実物化石の芸術的な曲線に魅了された。

「恐竜の骨って美しいんです」

そうういうしそうに語るのは、小学館・図鑑NEO編集部の大藪百合さん(28)。恐竜図鑑の担当になり、「勉強に」と訪れた博物館で恋に落ちてしまった。

「なぜ、体が大きいのか？　なぜ、しっぽは長いのか？」

彼らをもっと知りたい思いが、次々と湧き上がってくる。

学会や発掘調査に参加

恐竜本を片っ端から読み、朝起きたら化石などの新発見がないか、科学誌サイトをチェック。さらに資料を読むだけでは飽き足らず、研究者が集う「日本古生物学会」の講演を聞きに行ったり、白亜紀前期の地層がある福井県北谷層での発掘調査に参加したり。〝仕事スイッチ〟は四六時中オンになった。

「結局、恐竜の真実は誰にもわからないから、あれこれ推理できる。それがロマンなんです」

そんな大藪さんは現在、妊娠8カ月。定期検査でおなかの様子をエコーで見たとき「人間の大腿骨って恐竜のものと似ている」と、2億年前から続く生命の進化に感動したという。

「小さなことに一喜一憂しなくなりました。ホモ・サピエンスの歴史は20万年ほど。恐竜のそれに比べたらまだまだ。人も、もっと進化していかなくちゃ」

恐竜への情熱が、仕事や人生への探求心や向上心に転化されている。

情熱の矛先が「馬」に向くのは、サンビジネス・デザイン制作部の竹内アキコさん(25)。

「バリ！」

5月3日に行われたGIレース・天皇賞。京都競馬場の第4コーナーに馬群が差しかかると、悲鳴のような歓声を上げた。

視線の先にいたのはラストランとなった競走馬のウインバリアシオン(牡7歳)。愛称・バリだ。応援するために、東京から駆けつけたという。竹内さんは「UMAJO（馬女）」だ。

「あの子たちの魅力は外見の美しさ、一生懸命走る健気さ。本当にかわいいんです」

サラブレッドを「あの子」と呼ぶ時点で、竹内さんの〝馬LOVE〟ぶりがうかがえる。

効率的に働き情報収集

お気に入りの一頭であるバリは実力馬と評されてきたが、GIレースは2着が4回。あと一歩で〝勝てない馬〟だった。だが2度の屈腱炎に泣いても、レースに復帰する姿にキュンキュン。「自分もがんばろう」と、前向きになれたという。

レースのない平日も馬が気になる。調教は順調か、カイ食い（エサの食べ具合）はどうか。SNSを駆使して騎手のツイッター、スポーツ紙など複数から情報を得るのが日課だ。そのため、だらだら仕事はしない。効率的に仕事をこなし、少しでも愛する馬の情報を得たいからだ。

「昼休みなどの短い時間にさっと記事をチェックするので読解力がついたかも」（竹内さん）

〝恐竜女子〟の大藪さんと〝UMAJO〟の竹内さんには共通点がある。「仲間を増やしたい」という思いだ。だから自分の思いを熱く語る。

オタク文化に詳しい武蔵野学院大学の佐々木隆教授は、こう分析する。

「ネットの普及で情報の入手・発信が容易になった最近のオタクは、〝自己完結タイプ〟から〝承認されたいタイプ〟まで多様化した。昔のようにこだわりを独占するだけでなく、『いいね』と共感されることが喜びになっている。それがモチベーションにつながるのでは」

なるほど、オタクが増えれば世の中もっと熱くなる。〝好き好きパワー〟は強大なのだ。

編集部　吉岡秀子（写真も）

「夢は世界に恐竜本を輸出すること」と大藪さん（左）。かわいい恐竜グッズを見つけると、つい買ってしまう（上）

「すねたり、甘えたり。感情豊かなかしこい動物なんです」と馬にベタぼれの竹内さんは、東日本大震災で被災した馬の里親になった